

日本語指導が必要な幼児と保護者へのサポートの事例研究

—滋賀県下A幼稚園でのエスノグラフィーを通して—

Case Study on Support for an Infant Who Needs Japanese Instruction and her Parents

趙 学梅
Gakubai CHO
教育学部元留学生

堀江 伸
Shin HORIE
滋賀大学教育学部

<キーワード> 日本語指導が必要な幼児, 子ども理解, サポートのあり方, エスノグラフィー

1. はじめに——問題意識と目的

滋賀県は、人口比でいうとかなり多くの「日本語指導が必要な児童」を抱えている。いくつかの市では、重点的課題として取り組まれ、サポート体制ができあがっている。指導員、講座の開設、施設同士の連携など、必要とされることは実施されているといえる。

こうした「日本語指導が必要な児童生徒」、つまり外国籍の子どもたちや国際結婚家庭の子どもたちに対する指導のあり方は、全国においては重要な教育課題の一つとなって久しく、その対応や教育実践が取り組まれている。しかし、その対象は「公立校」である小学校・中学校、つまり児童・生徒に対してであって、幼児や修学前においては十分とはいえない。実情についての調査や事例研究などもすすめられているが、小学校・中学校を対象にしたものが多く、幼児についての研究が蓄積されていない状況にある。

筆者のひとり趙は、留学生の立場を活かして、2014年5月から滋賀県下のA幼稚園で中国語支援員をはじめた。その幼稚園で何人かの日本語がわからない幼児たちに出会った。彼らは日本語がわからないので、日本人の友達ができず、また幼稚園生活にもなかなかなじめないなどの様子がよくみられた。その子どもたちの母親も日本語がわからないので、子どもを日本の幼稚園に通わせるには大きなストレスを抱えてしまい、支援員である趙に相談に来ることが何回もあった。

そこで、こうした日本語指導が必要となる幼児とその保護者が抱えている問題を、参与観察とインタビューなどの手段を通して明らかにし、子どもたちがより楽しい幼稚園生活を過ごすことができ、保護者にとっての問題やストレスを軽減・解消できるように、どのようにサポートしていけばいいかを考察したいと考えた。本論文では、趙自身が取り組んだA幼稚園での経験を、筆者ら二人で振り返り省察することを通して、日本語指導が必要な幼児とその保護者に求められる支援の質について考えていくことにした。

2. 日本語指導が必要な児童生徒の状況

日本語指導が必要な児童生徒の現状

1990年5月に改定された「出入国管理法」によって、入国する親に伴って来日する外国籍児童は増加した。背景には、近年の国の経済発展のために、高度の専門的な能力を有する外国人の上陸手続を一層円滑化するなどの措置を講ずることによって、外国人就労者の人数が増えたこと、そして特に日系三世までの在留資格が緩和され、就労が可能となったことがある。そして、それとともに外国籍児童も増え、文部科学省2014年の調査によると、全国の公立学校に在籍している外国人児童生徒数は73,289人で、2012年より1744人増加したとのことである。

外国籍の子どもたちは大きな問題を抱えている。朝倉隆司(2011)は、愛知県及び静岡県の一部の日系ブラジル人の調査を通して、外国籍の子どもたちが抱える問題をまとめている。まず、今まで生活してきた環境や生活習慣などと違う日本に来て、「様々な生活習慣の問題がある」、「特に食事の味、マナーがあわない」ということがあり、中学校では「学習内容が難しく」なっていて「校則も厳しくなる」ので学校に適應するが困難だということが大きな問題であるとしている。

また、NGO団体のCCSは外国にルーツを持つ子どもの抱えている問題について、次の5点にまとめている。

- 1.日本語習得の困難さ：話す聞く、読む書く等の日本語力習得が上学年ほど困難になっている。
- 2.教科学習習得の困難さ：国語科はもちろん算数科社会科理科などの基礎的学習についていけない。
- 3.高校進学への壁：学力がともなわないため、高校進学が大きな壁となっている。
- 4.日本の学校文化への適應の困難さ
- 5.情報不足と情報伝達ツールの不慣れ：さまざまな伝達がHP、SNSを通して行われるが、それにアクセスできず、また読み取ることに困難を抱える。

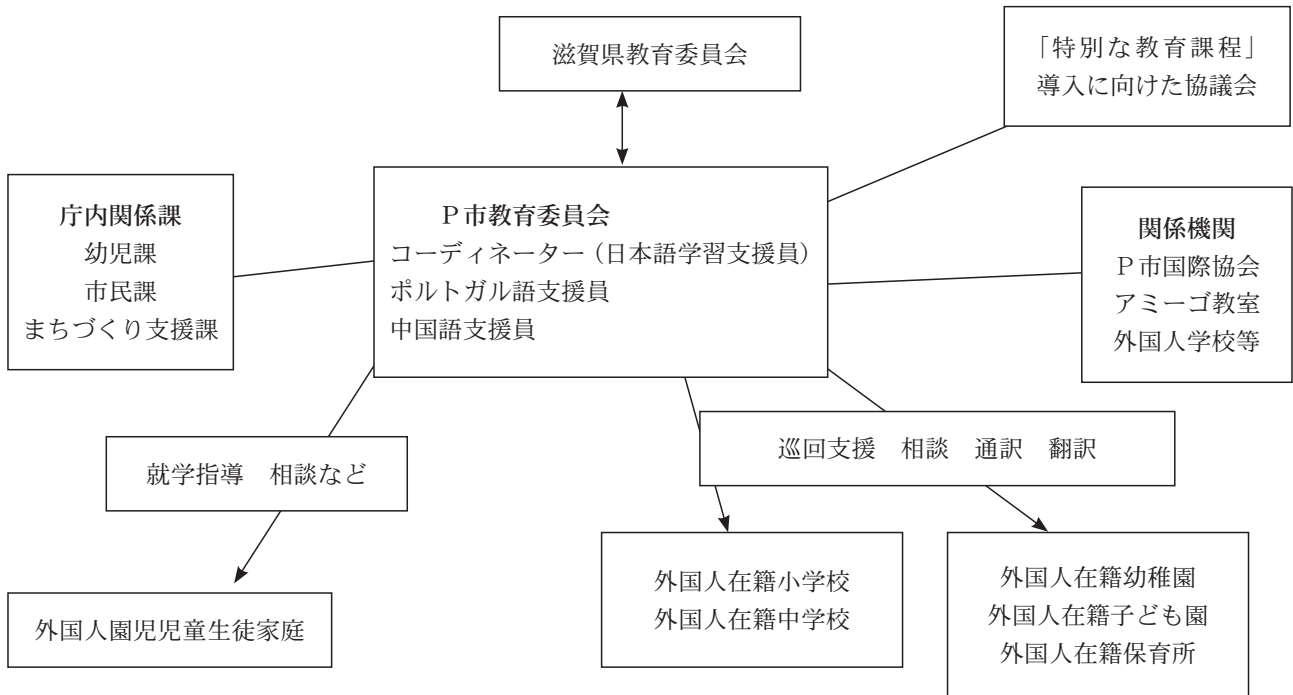


図1 日本語指導が必要な子どもの就学をサポートする体制と手立て（P市）

滋賀県においても同様な状況である。公立の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校に通っている日本語指導が必要な外国籍児童生徒の人数は972名で、日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒の人数は89名いる。また、P市教育委員会のデータによると、現在P市の幼稚園・こども園・保育所、公立小、中学校に通っている外国籍児童生徒は65名いて、その中に日本語指導が必要な子どもは、37名になるという。

支援については、滋賀県教育委員会が具体的に取り組む内容は大きく分けて2つある。一つ目は運営協議会の設置・開催で、二つ目は連絡協議会の開催である。そして、P市教育委員会は県教育委員会と足並を揃えた上で、県庁の機関や外部の関係機関と連携しながらP市内の各公立幼稚園、小、中学校に「日本語学習支援員」と「母国語の支援員」を派遣しているなどの措置を講じている。

A幼稚園の日本語指導が必要な幼児の現状

2014～15年現在、滋賀県下のA幼稚園に日本語指導が必要な幼児が5名いる。その中、中国にかかわる幼児が4名である。

そして本研究では、その4名のうちの1名「Dちゃん」を観察対象にした。2014年5月に三歳で入園し、年少クラス、そして年中クラスの12月になるまでの一年と八ヶ月の間、入園当初から関わり続けられたからである。

四人は、以下のようである。

- ・Bさんは三歳児で2014年の10月に来日した。そして、当時日本語が全く話せなかった。両親は中国人である。父親の仕事の関係で来日したが、帰国予定の見通しがある。
- ・CさんはBさんと同じ三歳児で、日本語も中国語も話せない。父親は日本人で、母親は中国人である。そして、発達の遅れがある。

表1 研究対象・Dちゃんの概要

研究校	A幼稚園
研究期間	2014年5月8日～2015年12月（週1日 3～5時間）
対象児	Dちゃん
研究方法	参与しながら観察する。関わりした後でフィールドノートをつける。また、ノートにつけていない部分を担任の先生にインタビューをする。
事例概要	最初Dちゃんとお会った時、彼女は場所にもかかわらず防災頭巾を抱きしめていた。そして、彼女は入園する当初日本語が全く分からない状態だったが、年少組から卒業するとき日本語がずいぶん上達した。また、6月に日本人の友達ができ、二人はジェスチャーで交流することが多かった。

- ・Dちゃんは現在四歳児である。三歳入園した当初、日本語が全く話せなかった。父親は日本人で、母親は中国人である。
- ・Eさんは現在Dちゃんと同じクラスにいて、4歳児である。父親は日本人で母親は中国人である。日本語の支援が必要ではない程度に話せる。

3. Dちゃんについての事例研究—子どもが抱えている問題及びその支援

概要と研究方法

最初Dちゃんとお出合いした時、彼女は場所にかかわらずいつも防災頭巾を胸に抱きしめて動いていた。日本語が全く分からないので、筆者・趙とは中国語で話すことが比較的多かった。

彼女は2014年6月には日本語がまだしゃべれなかったが、日本人の友達と二人で先生が話すときも、その友達と二人でいたずらをするのがよく見られた。2014年7月頃には、中国語出来るEさんと友達になり、Eさんの行動を真似ることがよく見られた。日本語が少し出来るEさんがパイプ役、守るクッションとなっていた。そうしたこともあって、年少組から卒業する頃にはDちゃんは日本語がずいぶん上達した。2015年12月現在、普通のコミュニケーションが取れるくらいになっているが、2015年7月の中旬から母親とともに中国に2ヶ月ほど帰り、9月日本に戻ってから中国語が大爆発するかのように使っていたし、また情緒が不安定になったこともあった。

研究方法は、参加しながら観察するエスノグラフィーを選択した。毎回関わりした後でフィールドノートをつける。また、観察ではわからない部分をクラスの先生にインタビューすることにした。

Dちゃんの言動から抱えている問題を見る

以下、保育参加中に見えてきたDちゃんの言動、またその言動から推測した彼女が抱えている問題について述べていく。

(1) 大きな不安を抱える

初めてDちゃんとお出合いした時、彼女は背中にカバンを負い、両手で自分の防災頭巾を抱きしめ、お母さんが帰った方向をガラスドアからじっと見ていた。そして、中国語で声をかけていくと、彼女は極めて慎重に、不安そうに見返していた。また、どの場所に行っても防災頭巾を抱きしめたままであった。かばんを背負ってじっとお母さんが帰った方向を見ていたというのは彼女も早く帰りたい、幼稚園にいたくないということが想像できる。また、背中にはかばんを背負い、胸には防災頭巾を抱え、身の周りをもので隠すことや私を

慎重に見ることから、彼女はまだまだ不安で強い警戒心を持っていることが分かった。どの場所へも抱きしめた防災頭巾であるが、これは家から持ってきたもので、さらにその上のワッペンはおばあちゃんが手作りしてあげたもので、それを抱きしめると、家族がそばにいるようでより安心できたのだろう。

また、年中組になってから、Dちゃんの口から「ママ、しんぱい」という話がよく聞こえるようになった。しかし、「なんでママを心配するの、ママはどうしたの?」と聞いても、返事が来ない。また、お母さんではなくお父さんが迎えに来ると、いつも嫌な顔をしていて、お父さんと一緒に帰りたくなかったみたいであった。その後のある日、偶然に幼稚園に朝遅刻したDちゃんとお母さんの会話を聞いた。お母さんを家に帰らせたくなかったDちゃんがぐずったのに対し、お母さんは「もしDちゃんがママのことを聞かなかったら、ママひとりで中国に帰るわ」などと叱っていた。それを聞いてDちゃんは「いやだ、いやだ!」を言って、ママの手をさらに放そうとはしなかった。それで、私はお母さんの少し脅迫めいた、言うことを聞かせようとする発言と、Dちゃんの「ママ、しんぱい」の理由と何か関係があるのではないかと考えた。

(2) 日本語力のなさから生まれる困難

秋には、幼稚園では「どんぐり」が流行っていた。ある日、同じクラスのこうきさんが、拾ってきたどんぐりをペットボトルに入れ、それを振りながら「どんぐりコロコロ」を歌っていた。Dちゃんはそのシーンを見て真似をしようとしていたが、歌詞が覚えられないので、あきらめた。がっかりした表情だった。日本人の子どもは先生の歌を何回か聞いたなら歌詞が何となく覚えられるのに対して、日本語指導が必要な子どもはなかなか歌詞を理解できず、覚えられない傾向があった。また、それ以外、絵本を読む時間や大事な知らせを知らせる時間も、日本語指導が必要な幼児たちははっきり絵本を聞けなかったり、教室から逃げ出したりすることもあった。

日本語がわからないので、先生が何を言っているかわからない、また、絵本を読んでもらっても、いっしょに笑えない、何が楽しいかわからない。自分の思いを相手にうまく伝えられなくて、イライラする気持ち・・・やりたいことがあるのに、できないときのがっかりする気持ち・・・がいつも見られた。日本語力のなさで生活中にたくさんの困難を抱えている。

(3) 見てほしい、ほめてほしい

Dちゃんのクラスに、担任先生の二人と支援員の趙を含めて三人の大人がいる。彼女は何かができる、必ず私たち三人の先生それぞれの場所に行き見せてくれる。そして、お友達と行動するよりも、先生と一

緒に行動することが多かった。また、園庭で何かを見つけると、大声で「先生、見てみて!」と叫ぶ・・・ほめてあげると、すごうれしそうな顔をし、もっと頑張る姿が見える。Dちゃんのような行為についてクラスの二人の先生と相談すると、Dちゃんが大人に見てほしい、ほめてほしいと思っていると同じ意見になった。また、Dちゃんのお母さんは迎えに来る時、よく携帯を見ていたことに担任の先生が気づいた。ほめることについてお母さんに聞くと、家であまりほめてあげないということも分かった。お母さんに見られること、受け止めてもらえることが少なく、ほめられることも少ないことが、こうした行動になっているといえる。

Dちゃんを支援する

以下ではDちゃんに対する支援、また可能な提案を述べていく。

(1) 「大きな不安を抱える」を支援する

遊びに夢中になると不安をあまり感じなくなることに気づいて、防災頭巾を抱きしめていた時期のDちゃんにできるだけ遊びを誘うことにした。また、最初距離を縮めるために私は中国語で声をかけた。それから、彼女の時々「ママは?」の質問に対して、「お母さんは今Dちゃんのために何かをしている」というように、Dちゃんのためにママは何かしていると話して、安心させる答えを返した。それで、Dちゃんはだんだん落ち着いてきて、6月にはようやく防災頭巾を持つことはなくなった。

また、お母さんが中国へ帰ってしまって一人残されるのではという漠然とした心配を抱えていた「ママ、しんばい」のDちゃんに対して、まず担任の先生に自分が聞いた話や推測した理由を話し相談した。そして、担任の先生を通して、懇談会の時にお母さんに「ママ、中国に帰るからねえ」というような発言をできるだけやめてもらいたいとお願いをすることになった。その後、幼稚園でDちゃんその発言「ママ、しんばい」を聞くことは少なくなっていた。

(2) 言葉の習得へ

Dちゃんの歌詞がわからない、覚えられないことについて、私はいい対策が思い浮かばなかった。しかし、偶然にデジタル絵本の話聞いて少し調べてみた。そして、カラオケで歌う時のような文字追い機能がついているデジタル絵本を体験した子どものよめるひらがなの文字数は体験以前に比べて、平均で3文字増加したという研究結果を見つけた。つまり、そのようなデジタル絵本や歌うときデジタル歌詞を使うと、外国人の子どもにもよりたくさん日本語が習得できるだろうと考える。そうすると、彼らの日本語力のなさで生

まれる困難も次第に少なくできるだろうと思う。

(3) 見てほしい、ほめてほしい

お母さんが家であまりDちゃんをほめてあげないことについて、担任の先生がDちゃんのお母さんと懇談する時、母国語支援員として間に入って、先生の話及びその願いをお母さんに中国語で伝えた。お母さんの態度や言葉は、少しずつ変化していった。支援員としてDちゃんと関わる時よくほめてあげているが、これからは表面的なことではなく、彼女らしさをしっかりと見つけてもっと温かくもっとほめてあげるつもりだ。

事例の考察

Dちゃんの「見てほしい、ほめてほしい」、「ママ、しんばい」の問題を書く時、Dちゃんのお母さんの様子も少し紹介した。一見、お母さんがあまりDちゃんのことをほめてあげてなかったり、Dちゃんよりも携帯をよく見ていたりするなどあまりよくない行動を取っているように見えたが、それもお母さんりの理由があるのではないかと考える。Dちゃんのお母さんの付き合いから、Dちゃんのお母さんは時々Dちゃんに対して少し怒りっぽいけれども、むしろ非常にさっぱりした正直な人だと理解できる。また、日常の会話からもDちゃんへの愛や誇りがよく感じ取れる。それなのに、送りや迎えに来るとき、よく携帯を見るのはお母さん自身が寂しいからではないかと考えるようになった。

お母さんは日本語が分からないので、先生やほかの保護者とコミュニケーションをしようとしても、できない。それで、携帯を通して遠方にいる中国人の友達と交流するしかできないのではないかと、そうして寂しさを紛らわせているのではと考える。お母さんもたくさん悩みを抱えているのが見て取れるようになった。そこで、次章でお母さんの悩みやストレスについて明らかにしたい。

4. Dちゃんのお母さんが抱えている問題

お母さんへのインタビューの概要及びその結果

お母さんに対して、インタビュー調査を行った。質問の主な内容は、毎日の生活と日本文化理解について、育児の悩みについて、子どもが家にいるときの様子について、現在抱えているストレスについて、これら4つの部分で構成される。半構造化インタビュー法をとり、話の内容をキーワードを選び、分類することによって、内容を整理し、理解することにした。その結果は下記の通りである。

Dちゃんのお母さんは中国のハルビンの出身で今年41歳である。2008年1月に来日した。来日してからし

ばらく工場で働いて妊娠したあと仕事を辞めて、今は専業主婦である。インタビューを通して、Dちゃんのお母さんはほとんど日本の生活に慣れたが、日本語が話せないで家族を含む日本人とうまくコミュニケーションをとれないという。また日本の食事にもまだ慣れていないと分かった。また、お母さんは日本語の勉強をしたことがほとんどなく、簡単な単語が分かるが、文法は全く分からないということが分かった。さらに、日本語がうまくできなくて、夫と夫のお母さんと矛盾を生じるので、将来中国に帰るつもりだと言っていた。

一方、Dちゃんのお母さんはたくさんの友達がいるということが分かった。そして、ストレスを感じる時、自分の家や友達の家に行ってお酒を飲んだり、一人でドライブをしたり過ごしていると答えた。育児の悩みとして、お母さんは時々Dちゃんの心理を理解することができないと話してくれた。また、育児の悩みの相談相手を聞くと、中国にいる自分の母親また中国人の友達をあげた。

最後、子どもが家にいる時の様子を質問すると、Dちゃんは家でよくお父さんと一緒に遊ぶと答えた。また、担任の先生に言われてからDちゃんをよく褒めるようにしていると分かった。

「お母さん」の存在と家族

第2章第2節に現在Dちゃんが抱えている問題について述べた。ここで、子どもが抱えているそれらの問題を、お母さんのインタビューの結果と統合してお母さんに由来すること、またその家庭背景を探っていく。

(1) 大きな不安を抱えている背景

「毎日の生活と日本文化理解について」の質問部分では、お父さんが子どもを甘やかすのに対してお母さんは厳しいほうで、そして、家でお母さんとお父さんは日頃Dちゃんの教育問題をめぐってよく口喧嘩をしていると言っていた。そして、日本語が殆どわからないので、家族を含む日本人とうまくコミュニケーションができなく、何かつらいことがあっても自分の気持ちをうまく表現できないという、大きなストレスを抱えていることが分かった。また、「普段、ストレスをどうやって発散しますか」と質問すると、ストレスと感じる時家族に相談せず一人でお酒を飲んだりドライブをしたりしているという。そして、将来の予定については、日本語がわからなく人とうまくコミュニケーションがとれないので、中国に帰るつもりだと答えた。

(2) 日本語力のなさから生まれる困難の背景

日本語に関して質問したところ、Dちゃんのお母さんは日本に来る直前中国で1か月間日本語勉強をしていた、また日本に来てから国際協会が開いた日本語教

室に2回を通ったと答えた。だから、日本語力もあまり高くないと見られる。そして、普段のコミュニケーションでは単語しかしゃべれなくて文法は全くできないので、たとえ何かを言おうとしても、自分の気持ちを日本語でうまく表現できないという。それから、Dちゃんとのやり取りも日本語と中国語を混ぜて話していて、時々Dちゃんに日本語のミスを指摘されているという。

(3) 見てほしい、ほめてほしいことの背景

上記ではDちゃんを甘やかすお父さんと違って、お母さんは厳しいほうだと紹介した。そして、お母さんは我慢できない欠点があるので、Dちゃんが大きな誤りを犯したとき、時々手を出す時もあったと言っていた。また、現在Dちゃんをよく褒めるようにしているが、それは先生に言われてからするようになったという。それから、Dちゃんは休みの時お母さんと遊ぶよりお父さんの方とよく遊んでいるという。もちろんお母さんも遊んであげているが、その時間はお父さんと比べたら少ないということが分かった。

お母さんが抱えている問題

インタビューを通してお母さんが抱えている問題をまとめていきたい。

(1) 日本語を勉強しようとしても、勉強の場が整っていない

インタビューの概要のところでDちゃんのお母さんはほとんど日本語の勉強をしたことがないので、日本人とうまくコミュニケーションがとれないという話を紹介した。実は、私が今まで接した中国人のお母さんたちの大半は日本語の悩みを抱えている。あるお母さんから、もし我々のようなお母さんたちを対象にする日本語教室があればいいなあという願いを聞いた。そして、そのことを市教育委員会の先生に伝えて、先生も一所懸命探していたが、結局お母さんたちの条件にあう日本語教室を見つけられなかった。ちなみに、お母さんたちは平日子どもを幼稚園に預けてから時間が空いているということなのに、教育委員会の先生が見つけてくれた日本語教室は土曜日の夕方に授業が行われている。お母さんたちはその時間帯はとても忙しいもので、参加できないということだった。

(2) 日本社会・文化に入り切れない

Dちゃんのお母さんは日本人と結婚したと言っても、日本語がわからないので日本人とうまくコミュニケーションを取れない。また、日本人の友達が3、4人いるが、あまり連絡しないと答えた。食事の面でも、日本料理より中国料理のほうがおいしいと思っていて、家でほとんど中国料理を作っているという。

また、幼稚園のPTAに関して、中国の学校にはそういう組織がないので、その役割また運営の仕方についてDちゃんのお母さんは全く分からない様子だった。一方、幼稚園の先生から聞いたところによると、外国人だといっても、日本語がわからないといっても、役員の免除をすることができなく、お母さんもやらなければならないとのことだった。その情報を伝えたら、お母さんは非常に困る表情だったが、頑張ってやると言っていた。

(3) 身近に育児の問題・生活の悩みを相談する人がいない

「育児の悩みや問題があるとき、だれに聞いたり相談したりしますか」の質問に対して、Dちゃんのお母さんは中国にいる自分の親また中国の友達に相談すると答えた。日本語が話せずわからないために、何かがあっても身近にいる主人、Dちゃんのお婆さん、幼稚園の先生などに相談することもできず、遠く中国にいる人や中国人の友達にしか助けを求められていないということが分かった。それでも、子どもが問題が起こした時、その詳しい前後の状況をお母さんが言葉だけで説明しても、中国人の友達に分かってもらうことができず、日中教育の制度上ならびに実情の差異もあって、Dちゃんにとって一番いい方法の提案を見いだせないでいるようだった。

普通、日本人のお母さんだったら何かがあるとき周りにいる友達や専門機関に聞いたり相談したりすることができるが、Dちゃんのお母さんは外国人なので、日本語が分からなかったり日本の文化に入りきれなかったりなどの理由でなかなか相談に行くことができないでいる。

5. 総合考察

本論文では、まず日本語指導が必要な児童生徒の現状を日本全国、滋賀県、P市、A幼稚園の順でまとめた。そして、先行研究を通して、現在日本の学校に在籍している日本語指導が必要な児童生徒が様々な大きな問題を抱えていて、彼らが日本の学校生活・社会に馴染めるために、支援が必要だということが分かった。

次に、私が幼稚園で参与観察をしながら、交流の中で見つけた問題及びその支援について述べた。入園したばかりの子どもは誰でも不安を感じるが、日本語が分からない彼らにとってはなおさらだと考える。また、入園する当初彼らは日本語力がないので、先生や友達の話の意味が理解できず、人に自分の思いを伝えることもできず、幼稚園生活が十分に楽しめない日々であると見られた。それから、子どもの言動にはその背景があるとされているとおりののだが、彼らと関わりながらその言動の意味も追求してきた。それで、私は子どもが本当に単純で無邪気だと感じた。我々大人の

意識的な言動はもちろん、無意識的な言動も、子どもは直観的に理解し、そのまま受け止めると考えられるので、子どもに対しては、親であろうが教師であろうが慎重な言動をとるべきだと考えた。

また、お母さんが抱えている問題について述べた。インタビューを通して、お母さんたちが育児の悩みを抱えている以外、日本社会への適応にもストレスを感じていることが分かった。子どもたちが抱えている問題をお母さんへのインタビューを通して分かったことと結びつけて、その問題の家庭的な原因を探った。すると、子どもたちが抱えている問題はすべてお母さんや家庭に原因が見つけられ、お母さんや家庭が子どもに大きな影響を与えていることを改めて認識した。ゆえに、今後子どもがより安心して楽しく日本で生活していけるためには、お母さんや家庭への支援もしなければならないと考える。

ところで、お母さんへの支援について十分に述べることができなかった。それは一人の力ではできないものだと考えるからだ。お母さんを支援するためには家庭、学校（幼稚園）、社会の三者の連携が必要だと考える。現在の三者連携がまだ不十分な状況の下、何ができるだろうか。

今、私が考えるお母さんにとっての一番有意義な支援の仕方は、できる限り子どもの取り組んでいる活動にお母さんを参加させるという方法である。12月に終わった音楽会を例にする。発表会で子どもは普段歌っている歌だけではなく、三種類の楽器を使って「あわてんぼうのサンタクロース」を演奏した。そのことをお母さんに事前に知らせ、子どもと一緒に歌詞の意味を調べたり歌の練習をしたりしてもらう。そのことは日本語の勉強にもなるだろうと考える。また、この行事を通して、日本の学校文化への理解も深まるだろう。さらに、子どもと交流し日本の学校文化を理解することを通して、子どもや学校の先生、ほかの保護者と話題を持つようになり、距離が縮まる。そうすることで自分の悩みをより少なくさせ、かつ具体的になるのではないかと私は思う。もちろん、この方法は言葉にすると簡単だが、家事やほかのことで忙しいお母さんを子どもの活動に参加させる動機付けることや、幼稚園（塾、水泳教室など）の許可を得るのが難しいので、それを含めてお母さんへの支援が今後の課題になると考える。

私が今回の研究を通して大切だと思うことに、以下のような四点が挙げられる。

一つ目は、教師や廻りの大人に求められる「子ども理解」についてである。今までの大学の授業でもその言葉を何回か聞いたことがあるが、実際にその姿勢・態度を確実に実践することは初めてである。今回のこの小さな実践を通して、子どもの言動には意味があることが理解できたし、また、彼らに心を傾けて支援す

ることによって、子どもの問題行動が少なくなるということを実感した。それから、子どもの心理や行動の意味を理解することを通して、子どもとの距離を縮めることができ、信頼関係を築くことにも効果があると実感した。

二つ目は子どもに接するとき、慎重な言動をとるべき点である。前にも述べたように、子どもは純粋で我々大人の言動をそのままに受け止めるので、少し不適切な言動をとると、子どもの心身に大きなマイナスの影響がはたらいたこと、「中国に帰るわ」という大きな不在の心配がDちゃんの不安を大きくしたと言える。ほかの子どもの様子からもそういう傾向があると見られた。

三つ目は、保護者は大人であるから支援しなくても大丈夫だと考えるのをやめるべきだ。親は大人であるが、実際育児の中で様々な難題にあっている。その中で、自分の力で乗り越えるべき困難を抱えている。また、親は子どもと一緒にいる時間が一番多いので、親のその不安やイライラする気持ちは知らず知らずのうちに子どもに影響を与える。それも子どもの成長にいいとは言えない。お母さんたちへのインタビューを通して、外国に住んでいる家庭や国際結婚の家庭には様々な問題があるということも分かった。そのような家庭の子どもを理解・支援するとき、彼らの親を理解・支援することもしなければならないと考える。

最後四つ目に、外国にルーツを持つ人々がより安心して楽しく日本で生活できるためには、偏見がなく温かく、受容度が高い社会を作ることの大切さである。特に、行政機関の連携がまだ整っていない現在、共生する社会を目指して一人ひとりがお互いに思いやっ、努力すべきだと考える。

【主な参考・引用文献】

朝倉隆司 2011 外国人児童生徒の「こころのケア」を考える報告書
 初等中等教育局国際教育課 2011「帰国・外国人児童生徒受入促進事業」に係る報告書
 初等中等教育局国際教育課 2011 外国人児童生徒受け入れ手引き
 高嶋景子, 砂上史子, 森上史朗編 2011 子ども理解と援助 ミネルヴァ書房
 辻本孝子他 2012 ニューカマーの子どもが生きる学級づくりと子ども理解 滋賀大学教育学部附属教育実践センター紀要
 東京学芸大学国際教育センター 2011 外国人児童生徒の「こころのケア」を考える報告書
 文部科学省2014日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況などに関する結果について

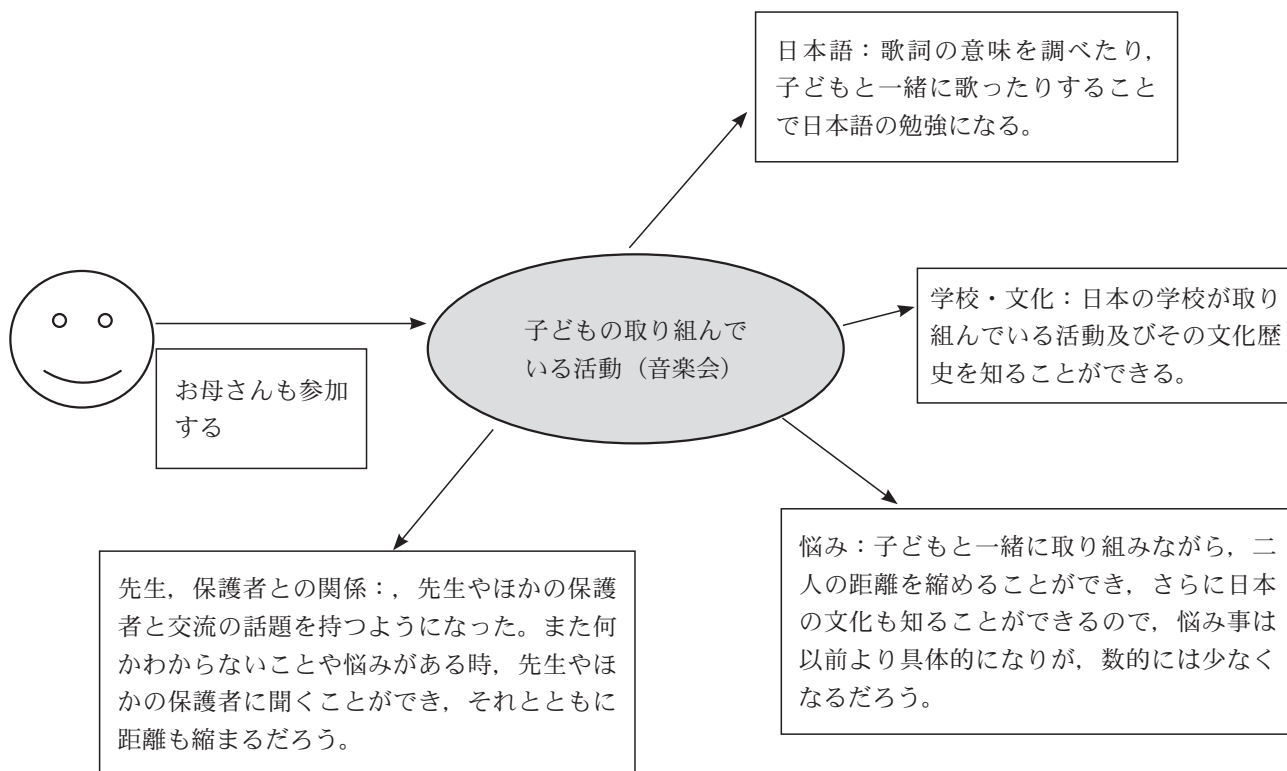


図2 学習活動へのお母さんの参加が持つ意味